



博物館友の会だより

題字：千葉半厓

文化振興ニュース

水戸烈士記念館（旧緋蔵）整備完了と公開！

令和六年十月十一日（金曜日）より水戸烈士記念館とそのガイダンス施設が一般公開されました。

水戸烈士記念館（旧緋蔵）は、元治二年（一八六五）に敦賀で降伏した水戸天狗党の浪士八二三名を収容した船町（現蓬萊町）に所在した荷蔵十六棟の内の一棟です。戦後、敦賀港修築工事で撤去が計画されていましたが、保存を希望する地域住民の運動を受け、昭和二十九年（一九五四）に「水戸烈士記念館」として松原神社境内に移築されました。

この建物は、水戸天狗党の浪士が収容された歴史と、それを保存しようとした市民運動を物語るものであるとともに敦賀市に唯一残る近世期敦賀港の倉庫であることから、地域を理解する上で有益であり、きわめて貴重なものとして、令和二年十一月六日に有形文化財（建造物）として敦賀市指定文化財の指定を受けました。令和三年から令和五年にかけて移築・修復工事が行われ、現在の位置に移っています。棟札には、「寛文一〇年（一六七〇）」と記されていることから、少なくとも江戸時代から倉庫として利用されてきたことがわかります。（以上敦賀市HPより https://www.city-isunaga.lg.jp/snpl/kosodate/gakko-yoku/kyoukaikai/bunka_shinkei/kyunshinguramini）



水戸烈士記念館とガイダンス施設

蔵の元の所有者である室家は、元禄時代、松尾芭蕉を色ヶ浜へ案内した「天屋五郎右衛門」を先祖にもつ商家でした。北海道から船で運ばれた身欠きニシンや、鰺鮓を一時保存もしていたこの蔵自体も、実は何かと敦賀の歴史と関わりがあります。ガイダンス施設と水戸烈士記念館（旧緋蔵）の外観は、いつでも無料で見学出来ます。もうご覧になられたでしょうか？

令和六年十月十九日・十一月二十四日・十二月七日の三回にわたり、松原公民館の会議室をお借りし、新人学芸員・北村太智先生による「敦博ゼミ古文書講座」が行われました。市民の皆さまや県外からの参加者も含め、毎回十人前後が参加され、熱心に古文書の読み方について学びました。文書を読む楽しさに目覚めた方もいたようです。



二人の知事と敦賀

— 滋賀・京都両知事の喧嘩から —

友の会会長 川村 俊彦

知事の喧嘩、というと剣呑だが、一人は明治初期、敦賀が滋賀県に属していた頃の県令（知事）・籠手田安定、いま一人は第三代京都府知事・北垣国道で、この二人（というより両府県）が琵琶湖疎水計画をめぐる激しく対立したことはよく知られている。

「琵琶湖の水を止めたるか」とは、京都や大阪を相手の喧嘩で滋賀県人が抜く伝家の宝刀だ……という冗談は兎も角、当時は東京遷都などで衰微した京都の復興を企図して政府もこの疎水計画を推し、反対する籠手田を遠ざけるため元老院議員に転任、鳥取、新潟の知事を歴任の後、工事の完成後、再び滋賀県に戻すという迂曲なことをしている。

ちなみに、今秋の敦賀市博特別展「日本横断運河計画」では、この琵琶湖疎水計画も取り上げ、上水道や水力発電のみならず大阪湾までの水運を視野に入れた展示構成となっており、筆者も多くの学びを得た。

籠手田安定は、肥前平戸藩の出身。慶應元年（一八六五）、京都行きを命じられ、時局

に係る情報収集に努めたが、幕末の倒幕運動には積極的に関わってはいない。攘夷主義は時勢を知らない「愚論」と斥けつつも、日本の国情に沿わない性急な西欧化には慎重であった。儒教思想を基とした「牧民官」（民を牧う官吏）たるを信条とする一方で、洋行経験のある五代友厚を訪ねたり、福沢諭吉の『西洋事情』に触発されるなど、西欧の知識・技術には関心を抱いており、明治維新を「旧弊ヲ一新」する好機だと捉えていた。

明治八年（一八七五）二代滋賀県令に就任し同十七年に転出。この間、地租改正に動揺する民心の安定を図り、また治水事業に意を用いた。姉川・高時川・田川の合流地点で頻発する洪水に備えた田川カルバートの建設は、その代表的な業績といえよう。

明治九年から十四年まで嶺南地域は、籠手田治政の版図であった。敦賀には彼が撰文を起草した「金崎城趾碑」（明治十一年）と「松原神社碑」（同十三年）が遺っている。紙幅の都合で詳述はしないが、いずれも忠義を讃えた内容で、当然ながら新政府の唱道した王政復古論に適うものと言える。

北垣国道は但馬国の農民出身で幕末の尊皇攘夷運動に加わった「草莽」の一人である。

因幡鳥取藩、備前岡山藩、そして長州などの諸藩と関わりながら、天狗党の藤田小四郎らとも連絡を取り合っていた。戊辰戦争では山陰道鎮撫総督の西園寺公望に供奉し、次いで北陸道鎮撫使の高倉永祐・四条隆平率いる官軍に鳥取藩の隊士として参加する。

慶應四年（一八六八）六月、同隊が敦賀に宿陣した際、土倉修理之助（岡山藩）、荒尾駿河（鳥取藩）の両軍監が水戸浪士の墓所に石灯籠を寄進した。このとき北垣も同輩と並んで石灯籠を寄進している。現在、史跡武田耕雲斎等墓に向かって右側に土倉修理之助の名を刻した一基があり、左側に（碑表）「河田弘吉郎源壽景／柴捨蔵日下部国道」（碑背）「慶應四年戊辰七月建立永厳寺取次」と刻銘のある一基が建つ。この柴捨蔵、日下部国道は、いずれも北垣の変名である。

かつての同志とも言える藤田小四郎らの墓前で、彼の感慨は一入であったろう。

籠手田安定と北垣国道。後に長等山（疎水の通る府県境）を挟んで対峙することになる両知事は、時と舞台は違えど、敦賀とは浅からぬ縁をもった二人なのである。

○令和六年度展示のご案内



令和六年度は敦賀や敦賀市立博物館を代表する文化財や歴史的トピックを順次取り上げた企画展シリーズ「つるが、発見！」敦賀の歴史を深掘・探検」を実施しています。

▼一展示室 平常展示 近代の敦賀

三月十五日（金）～四月二十一日（日）
平常展では、一部のコーナーを入れ変えながら、主に敦賀の近代の通史展示をしています。

▼二・三階展示室

第五期 冬季企画展

行き交う人々、交わる文化

～みなとまち敦賀の美～

十一月二十八日（木）～一月十三日（月）
古くから日本海側と都とを結ぶ海陸交通の要衝として栄えた敦賀は、江戸時代に「北国の都」（井原西鶴『日本永代蔵』）と称されたほど人や物が行き交うにぎやかなまちでした。その豊かさは美術の視点からも知ることができます。

本展では、敦賀ゆかりの絵師たちの活躍や、来敦した文人墨客とのつながりが感じられる品々をご紹介します。初公開作品を含めて、近世から近代の美術品を展示し、敦賀の趣味人たちが育んだ風雅な世界を見ていきます。

本展を通じて、みなとまち敦賀の自由闊達な文化的風土とその美しさを感じていただければ幸いです。



塩川文麟『釈迦如来坐像』
天保11年(1840) 善妙寺蔵

三階で展示中の仏画は

たてよこ二めーとる以上

大きい！

▼三階展示室

第六期「敦博刀剣資料優品展」

一月十五日（水）～二月二十四日（月）

博物館が所蔵する刀剣から郷土ゆかりの貴重な刀剣を中心に紹介いたします。

北村太智学芸員新任のご挨拶



四月より、新規採用で博物館に配属されました、北村太智と申します。出身は金沢で、そのせいもあって、前田利家や利長の研究をしております。

私自身は、まだ大学院の博士後期課程に在学しながら（博士論文）という存在にうなされながら、敦賀市で学芸員のお仕事をさせていただいております。

また、最近では関ヶ原の戦いを研究テーマのひとつにしておりまして、関ヶ原の時に前田利長と対峙した大谷吉継の本拠地でお給料をもらうことになるのは、運命とは思議なものであると感じ入っております。

敦賀は古代から近現代まで、日本史上重要なトピックが満載の地域であると認識しています。まずは敦賀の戦国時代を、市内・県内にとどまらず、広く全国にアピール出来たらいいなと思っています。

未熟者ですので、皆さまからのあたたかい御指導・御鞭撻を賜れますと幸いです。どうぞよろしく願いいたします。

○令和六年度後半イベントのご案内

■講演会情報

第二十二回吉継カフェ



小早川秀秋と大谷吉継

〔講師〕 奈良大学教授 外岡慎一郎氏

〔会場〕 きらめきみなと館 小ホール

申込不要／参加無料

〔開催日〕 令和七年一月十二日（日）

御案内

平成十八年に始まった連続歴史講座「吉継カフェ」も今年で二十二回目を迎えることになりました。

今年度は大谷吉継との因縁の相手として有名な小早川秀秋を取り上げます。

石田三成と吉継が徳川家康打倒を掲げて挙兵した後、秀秋は、西軍や東軍にとつてどのような存在だったのでしょうか。

不明な点が多い秀秋自身の動向や、吉継との関わりから、関ヶ原の戦いを今一度見直してみましよう。

事務局長の期待とつづき...

敦賀エフエム放送では、毎月第三火曜日にナビゲーターゆいさんが担当の講師が敦賀近隣の歴史について語るコーナーがある。このラジオ局の聴取エリアは敦賀のみならず、インターネットアプリなら全国で聴取出来るので、敦賀に縁のある県外リスナーも多いと聞く。私もこのコーナーでお話する機会をいただき、敦賀の中野宗兵衛の子息、飯田新七が老舗百貨店高島屋の創業者であることや、新七の血脈はトヨタ自動車創業一族にも繋がっていると飛躍した話まで展開した。が、反面、宗兵衛以前に遡ってはメモ書き程度の資料しかなく、史実を深掘りするのは困難な状況で、残りにくい歴史も多いと感じた。

話は変わり、先日、敦賀市立博物館にて『行き交う人々交わる文化』みなとまち敦賀の美く企画展』を拝見した。そのキャプションパネルで解説されている、敦賀の画会「一方会」のメンバーのなかに平口太兵衛の名があり、敦賀出身で金沢市在住の環境・民族考古学者、平口哲夫さんと関係があるのではないかとご本人に確認したと

ころ、この太兵衛は哲夫さんの母方の曾祖父にあたり、生後百日目に敦賀空襲で生家が消失したことから父親の赴任地である金沢へ移住、母親の幸枝さんは女子美術専門学校（女子美術大学の前身）の師範科日本画部を卒業、戦後に草月流「いけばな」と洋画を習い、洋画家として日本画と「いけばな」の影響を受けた洋画を多く描かれたとのこと。この会報のような出版物もデジタル化で検索しやすくなってきた時代、残りにくい歴史を少しでも後世に繋いでおきたい。ここに記しておきたい。



博物館友の会だより102号

令和7年1月8日発行

発行 敦賀市立博物館友の会
事務局 敦賀市相生町7-8

TEL 0770-25-7033

FAX 0770-47-6131

E-MAIL museum@ton21.ne.jp

〔編集後記〕

本来ならばこの「だより」、夏頃に発行予定でしたが、諸般の事情により大変遅くなってしまいました。申し訳ありません。

暑い暑い夏が終わり、秋が来たと思った途端冬が到来しました。昔は時に豪雪になる事もあった敦賀で、時折ドカ雪は降れども、全く降雪のない年もある昨今、しみじみ温暖化の影響を感じている方も多いのではないのでしょうか。1月下旬から2月上旬にかけて、もっとも降雪の可能性が高くなる時期。皆様お大事にお過ごしください。